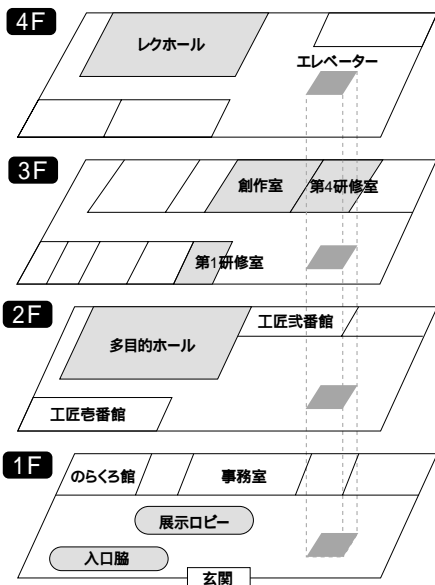


こうとう文化財まつり開催!!



会場案内図



伝統工芸体験



企画講演会「芭蕉の虚像と実像」

- 4F
企画講演会【レクホール】14:00～
- 3F
伝統工芸体験【創作室、第1・4研修室】10:00～
- 2F
伝統工芸体験【多目的ホール】10:00～
- 1F
文化財サークル合同展示発表会【ロビー】9:00～
伝統工芸品即売会【入口脇】9:00～

案内図



文化財サークル合同展示発表会



文化財めぐり



こうとう文化財まつり開催

区外史料調査報告

深川に大名屋敷がやってきた
～元禄期の津山藩邸～

芭蕉記念館新展示企画展
近現代の俳句を支えた人々

平成20年度中川船番所資料館企画展示
銀鱗跳躍
～夏の魚・鮎と人々～

旧大石家日記
江東外見発見
文化財掲示板

文化財係ではこれまで文化財保護推進員講習会、地区別講習会、文化財めぐり、民俗芸能大会・新春民俗芸能の集い、伝統工芸展、歴史と生活展、旧大石家住宅特別公開、企画講演会などのイベントを通して、文化財の周知につとめてきました。これらの活動によって、多くの方々に文化財保護活動のご協力・ご参加を得ています。

ただ、もっと多くの皆さんに文化財のを知っていただき、また直接ふれあう機会を設けたいと考え、今年度より新たに「こうとう文化財まつり」を開催することになりました。

まつりのコンセプトは「見て、「聞いて、体験しよう」です。当日は伝統工芸体験、松尾芭蕉に関する企画講演会、3コースの文化財めぐり、文化財サークルによる合同パネル展示発表会、伝統工芸品の即売会など、江東区の歴史や伝統工芸に親しむイベントをたくさん用意しています。夏の暑い1日を文化財づくしで楽しんでみませんか？

日時 7月12日(土)

場所 森下文化センター

(江東区森下3 12 17)

お問合せ 生涯学習課文化財係

03(3647)9819

*各イベントの時間や内容につきましては2・3ページをご覧ください。

江戸とう文化財まつりプログラム

お問い合わせ先 生涯学習課文化財係
TEL 03(36647)9819

伝統工芸体験

— ちょっとだけ江戸職人気分 —

すでに6月11日付『江東区報』でお伝えしていますように、区に伝わる伝統工芸の体験を行います。区内の職人さん区無形文化財保持者(が丁寧)に教えますので、はじめての方でも楽しく体験することが出来ます(汚れてもよい軽作業の出来る服装でご参加ください)。時間や内容につきましては3ページの「覧表を」参照下さい。

また体験のほかに着物の染み抜き実演も行います。着物の染みにお悩みの方、ご相談ください(時間:午後1時30分〜3時30分)。
場 2階多目的ホール、3階創作室・第1・2・4研修室

伝統工芸品即売会

当日、森下文化センター1階で、伝統工芸品の展示即売会を行います。
無地染め、すだれ、べつ甲、さらさら染め、江戸切子、建具、紋章上絵、江戸指物、縫紋など、さまざまな工芸品が販売されます。ぜひ、お立ち寄りください。

主催 江東区伝統工芸保存会

【体験申込】

どなたでもご応募いただけます。事前予約となっておりますので、空き状況などにつきましては電話でお問い合わせ下さい。

文化財めぐり

— 江戸深川をめぐる「小さな旅」 —

深川を歩いて、文化財をめぐる小さな旅を試みませんか。90分程度でコースは3つ(A芭蕉コース、B深江戸コース、C森下コース)。江東区文化財ガイド員がご案内します。

時 午前10時出発
発 A 芭蕉記念館、B 深川江戸資料館、C 森下文化センター
募 各コースとも20人(抽選)
費 A 70円、B 200円、C 無料

*なお、〆切を過ぎておりますが、定員に達していない場合がございますので、参加を希望される方は文化財係までお問い合わせ下さい。

企画講演会「芭蕉の虚像と実像 — 江戸と深川の中で —

延宝8年(1680)冬、松尾芭蕉はそれまで住んでいた日本橋から深川の草庵に移ります。そして、深川を拠点に「おくのほそ道」などの旅にでかけます。深川に移り住んだその背景、江東区との関わりなどについて、芭蕉研究者として第一線で活躍している江東区芭蕉記念館の横浜

文孝氏にご講演いただきます。
場 4階レクホール
時 午後2時
人 60名(電話 先着順)
師 横浜文孝(芭蕉記念館次長)
費 無料
申 電話で生涯学習課文化財係まで

文化財サークル合同展示発表会

江東区には区が主催する文化財保護推進中級研修会を修了された方々を中心とした、歴史や文化、また文化財について勉強しているサークルが数多くあります。今回5団体が合同でこれまでの活動・研究の成果をパネル展示で紹介します。サークルの皆さんの熱い展示にご期待ください。

場 1階展示ロビー
時 午前9時〜午後4時30分
参加団体 江東区郷土史同好会、江東区の文化と自然を愛する会、江東区の歴史と文化を継承する会、江東の江戸をたずねる会、江戸とう文化財一八会

文化財を清掃します!文化財クリーン作戦 — 森下文化センター周辺 —

文化財自主グループである江東区文化財保存愛護会(愛護会)では、月1回地域を決めて、文化財説明板などの清掃活動を行っています。今回は文化財まつりにあわせて、地元の中学生とともに森下文化センター界隈の清掃活動を行います。愛護会の清掃活動は今年で10年目と

なり、地元の方々にも定着しつつありますが、ご興味ある方は是非この機会に活動をのぞいて見て下さい。飛び入り参加も歓迎します。
時 午前9時30分 1階ロビー出発

伝統工芸体験一覧

体験名		定員	費用	内容	講師
10:00 ~ 15:00	1 鍛金(たんきん)	7人	3,000円	シルバーでストラップやペンダントのヘッドをつくってみよう (材料:約縦5cm×横3cm)	佐生明義
10:00 ~ 12:00	2 江戸切子(午前)	10人	1,500円	ガラス皿に麻の葉模様を彫ってみよう(約直径16cm)	小林英夫
	3 無地染め	10人	2,000円	しぼり染めスカーフをつくろう (生地正絹。約長1m×幅45cm)	近藤良治
	4 ベっ甲細工	15人	3,000円	べっ甲のペンダントをつくろう (約縦3.5cm×横2cm。革ヒモ付き)	磯貝 實
	5 さらさ染め(午前)	7人	2,500円	東海道五十三次の絵「阪之下」を染めてみよう (生地ちりめん。約縦33cm×横30cm)	佐野利夫 佐野勇二
	6 江戸指物	10人	3,500円	小さな飾り棚をつくってみよう(約幅18cm×高15cm×奥行9cm。材料タモ。三面アクリルガラス)	山田一彦
10:00 ~ 12:00	7 建具	10人	1,500円	木で筆箱をつくってみよう (約縦25cm×幅6cm×高5cm。材料タモ。印籠蓋)	友國三郎
	8 すだれ製作	4人	500円	色紙掛けをつくろう	豊田 勇
	9 建具組子	40人 20人	500円 2,500円	木を組んで組子細工をつくろう コースター(9cm四方) 小学3年生以上 和風写真立て(約高15cm×幅22cm) 中学生以上向け	木全章二
13:30 ~ 15:30	10 江戸切子(午後)	10人	1,500円	ガラス皿に麻の葉模様を彫ってみよう(約直径16cm)	小林英夫
	11 江戸木彫刻	10人	1,500円 3,500円 2,200円	刻字(干支)を彫ってみよう 姫小松の板(約縦15cm×横20cm) 姫小松の板(と同寸法。額付き) 桐の文箱 (約縦20cm×横15cm×高7.5cm。かぶせ蓋)	岸本忠雄
	12 さらさ染め(午後)	7人	2,500円	東海道五十三次の絵「原」を染めてみよう (生地ちりめん。約縦33cm×横30cm)	佐野利夫 佐野勇二
	13 江戸切子(午後)	6人	700円	ガラスの丸文鎮に切子模様を彫ろう (約直径8cm×厚2cm) 3人ごと1時間交代。 小学5年生以上向け。	須田富雄
13:30 ~ 16:00	14 江戸表具	6人	1,500円	自分の作品に裏打ちをしてみよう 色紙大程度の作品(紙・布)を持参のこと。	岩崎清二



1.鍛金(見本)



4.べっ甲細工



6.江戸指物(切子はつきません)



7.建具



8.すだれ製作
(色紙はつきません)



9.建具組子(和風写真立て)



13.江戸切子(見本)



14.江戸表具(一例です)

深川に大名屋敷がやってきた

（元禄期の津山藩邸）

江戸時代の江東区域を語る上で、大名屋敷の存在は大きな意味を持つていたと言えます。江東区域には諸大名の下屋敷や抱屋敷などが点在し、荷物の請け運びや藩士・御用商人などの人々の出入りが頻繁に見られたことでしょう。しかし、大名屋敷の実態を明らかにすることが出来る史料は限られており、具体的な姿をイメージすることは難しいものとなっています。平成19年度に行った区外史料調査では、大名家に残された記録類から江東区域の大名屋敷の実態を把握することを目的としました。

本調査で対象としたのは、美作国津山（岡山県津山市）藩主の松平家です。松平家は徳川家康の二男結城秀康を祖とする家柄（越前家）で、もともとは越前北庄70万石の大名でした。ところが、二代忠直が元和9年（1623）に隠居を命じられ、豊後に流され、その息子である三代光長も天和元年（1681）に越後騒動の責任を取って隠居し、伊予に流されています。この結果越前家の宗主は忠直の弟忠昌が跡を

継いだ越前福井藩と位置づけられます。このように越前家は福井藩、津山藩の他に雲松江藩、上野前橋藩、播磨明石藩（前橋、明石は廃藩置県時の領国）を含め、5家で構成され、御三家ではないものの、徳川宗家の血を受け継ぐ特殊な家柄でした。

光長の養子宣富が元禄11年（1698）に津山10万石に封じられると、柳原（千代田区）邸を返上し、鍛冶橋（千代田区）に上屋敷を構えました。ここで各年代の武鑑から津山藩の江戸屋敷の変遷を追ってみましょう。屋敷の記述を書き抜いたものが【表】です。

表を見ると、宝永3年（1706）にはじめて下屋敷の記述がみられ、「本所三ツ目（墨田区）」とあります。その後、明和2年（1765）に「高田（新宿区）」、天保6年（1835）には「深川海辺大工丁」が新たに加えられます。

最初に登場した本所三ツ目の下屋敷は、元禄10年11月15日に拝領を受けたことが確認されています（津山郷土博物館『津山藩の江戸屋敷 2001年』）。高田屋敷が登場する明和2年までの68

年間は、下屋敷の位置が変わっていないように思われますが、実際には屋敷地の移動がありました。『津山温知会誌』（津山温知会、1908〜1910年）によると元禄11年11月29日に深川屋敷7千余坪を拝領したという記事が記されています。つまり、津山藩は元禄年間に深川に屋敷地を持つていたことが確認できるので、実際どのような経緯があつたのでしょうか。

津山松平家の古文書については、旧津山藩倉庫に藩政文書や和書・漢籍類が保管されていました。この保管場所が「愛山」と呼ばれていたことから愛山文庫と名付けられ、現在は津山郷土博物館に収蔵されています（津山郷土博物館『愛山文庫目録』1991年）。この愛山文庫の中で注目されるものに諸日記類があり、特に「江戸日記」は767冊も残されています。

半年ごとと月ごとにまとめられた日記は内容が重複するものの、貞享4年（1687）から明治元年（1868）までの膨大なものです。

この江戸日記を見ていくと、元禄13年10月1日の条に、本所四ツ目にある4千坪の下屋敷を差し出す代わりに深川に下屋敷を拝領したいという記事が初めて登場します。そして、その翌日の条には松平宣富が老中土屋相模守政

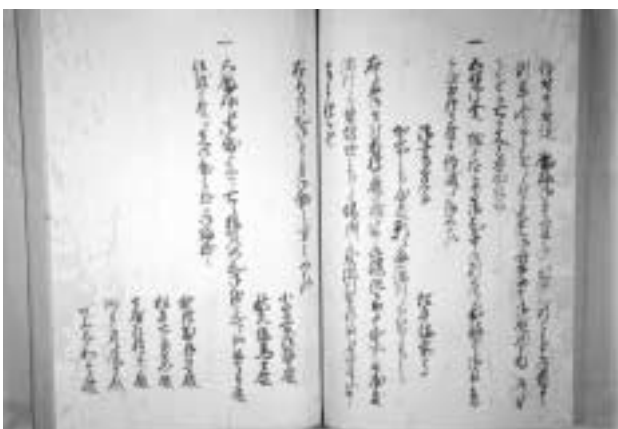
直に宛てた書状が写し取られています。

覚

四年以前本所三ツ目と四ツ目之間、津輕越中守下屋敷之隣にて、私下屋敷四千坪拝領申候、右屋敷差上、於深川二絵図附紙仕差上ヶ候内三而、下屋敷奉願候間、御仲問御相談被成、宜頼入存候、已上

十月二日 松平備前守

この書状によれば、「四年以前」の元禄9年に陸奥弘前藩主津輕越中守下屋敷の隣に4千坪の下屋敷を拝領していたことが記されています。屋敷の位置は「三ツ目と四ツ目」の間にあると記



「江戸日記」元禄13年11月29日条（津山郷土資料館所蔵）

【表】武鑑にみる津山藩江戸屋敷

	当主	上屋敷	中屋敷	下屋敷
元禄11	長 知	柳原		
元禄12	長 知	鍛冶橋御門内		
元禄13	長 知	鍛冶橋御門内		
元禄15	長 知	鍛冶橋御門内		
元禄16	長 知	鍛冶橋御門内		
宝永元	長 知	鍛冶橋御門内		
宝永2	長 知	鍛冶橋御門内		
宝永3	長 知	鍛冶橋御門内		本所三ツ目
宝永5	長 知	鍛冶橋御門内		本所三ツ目
宝永7	長 知	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
正徳元	宣 富	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
正徳3	宣 富	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
正徳4	宣 富	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
正徳5	宣 富	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
正徳6	宣 富	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保2	宣 富	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保3	宣 富	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保4	浅五郎	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保5	浅五郎	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保7	又三郎	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保8	浅五郎	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保9	浅五郎	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保10	浅五郎	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保11	浅五郎	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保12	長 熙	鍛冶橋御門内		本所三ツ目
享保13	浅五郎	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保14	浅五郎	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保15	又三郎	鍛冶橋御門内	外桜田	本所三ツ目
享保20	長 熙	鍛冶橋御門内		本所三ツ目
元文5	長 孝	鍛冶橋御門内		本所三ツ目
延享2	長 孝	鍛冶橋御門内		本所三ツ目
寛延3	長 孝	鍛冶橋御門内		本所三ツ目
宝暦5	長 孝	鍛冶橋御門内	高 田	本所三ツ目
宝暦10	長 孝	鍛冶橋御門内	高 田	本所三ツ目
明和2	康 致	鍛冶橋御門内		本所三ツ目・高田
明和7	康 致	鍛冶橋御門内		高田・本所三ツ目
安永4	康 致	鍛冶橋御門内		本所三ツ目・高田
安永9	康 致	鍛冶橋御門内		本所三ツ目・高田
天明5	康 致	鍛冶橋御門内		高田・本所三ツ目
寛政2	康 致	鍛冶橋御門内		本所三ツ目・高田
寛政7	康 又	鍛冶橋御門内		本所三ツ目・高田
寛政12	康 又	鍛冶橋御門内		本所三ツ目・高田
文化2	康 又	鍛冶橋御門内		本所三ツ目・高田
文政13	斉 孝	鍛冶橋御門内		高田
天保6	斉 民	鍛冶橋御門内		深川海辺大丁・高田
天保11	斉 民	鍛冶橋御門内		深川海辺大丁・高田
弘化2	斉 民	鍛冶橋御門内		深川海辺大丁・高田
嘉永3	斉 民	鍛冶橋御門内		深川海辺大丁・高田
安政2	斉 民	鍛冶橋御門内		深川海辺大丁・高田
万延元	慶 倫	鍛冶橋御門内	濱 町	海辺大丁・高田
元治2	慶 倫	鍛冶橋御門内	濱 町	海辺大丁・高田
慶応4	慶 倫	鍛冶橋御門内	濱 町	海辺大丁・高田

『江戸幕府大名武鑑編年集成』(東洋書林 2000年)より作成した。

してありますが、具体的な位置については分かりません。この下屋敷を返納し、深川に屋敷地を拝領したい旨を老中である政直に頼み、「御仲間」つまり老中達で相談の上取りなして欲しいと結んでいます。

この願いは現実のものとなり、元禄13年11月29日、江戸城波の間に出座した宣富は老中列座の中、土屋政直から「本所之下屋敷願之通深川二而替被下之」との書付を受け取ったのです。早速12月16日には、代官伊奈半左衛門忠順から傍示杭四本を取りに来るようにとの手紙が届きます。傍示杭を立て、この度津山藩邸になる敷地を明示したのです。そして、12月19日の四時に深川屋敷を受け取っています。江戸詰藩

士の他、大工や足軽、鳶などが付き添っており、水縄や鍬などの道具や赤飯、のし鮑、酒、茶弁などの飲食物、またこの日が雪であったため下敷きとして松板50枚を持参していました。

これらの手続きを経て、ようやく手に入れた深川屋敷でしたが、なぜ屋敷の替え地を願ったのでしょうか。本所三ツ目は4千坪、新しい深川屋敷は7千坪と約1・8倍の増坪となっていました。津山10万石の領地を得て、年貢米などの物資の増加などが見込まれたことから、増坪を願ったと考えられます。また、これに先立ち元禄11年6月23日に代官伊奈半左衛門と書院番深津八郎右衛門の2名が「深川築地御普請奉行」に命じられ、永代築地六万坪などの造

成や堀割の拡張といった事業が行われたことも大きな要因となったのではないのでしょうか。

しかし、宝永6年(1709)12月11日の記事に神田橋外にある松平右京大夫輝貞の上屋敷を中屋敷として拝領する願いを出しました。その際、深川屋敷については「地形早ニテ其上水附故普請難致候」とし、中屋敷拝領の際には深川屋敷を替え地したい旨が記されています。実際に手に入れた深川屋敷は日照り勝ちの土地である上、しばしば洪水の被害を受ける場所であったため、建物の造作や維持には向いていないと判断したようです。

宝永7年の日記は保存状態が悪く、史料を開披することが出来なかったた

め、詳細はわかりませんが、この時以降深川屋敷の記述はなくなっています。したがって、中屋敷を手に入れた際に深川屋敷は手放したと考えられます。

その後、津山藩は寛政元年(1789)に抱屋敷を所持し、「武鑑」にも「深川海辺大丁」として記されるようになりました(【表】参照)。この他、津山藩は砂村新田にも屋敷を持っていたという記述が残されています。今回の調査では日記の総体を見ることが出来なかつたため、元禄期の深川屋敷に関する記述を中心に拾い上げましたが、寛政期以降深川屋敷に関する記述は多くなっており、今後継続して調査・研究をすすめていきます。

(文化財専門員 龍澤潤)

「近現代の俳句を変えた人々」

6月26日(木)〜12月14日(日)

芭蕉記念館では、明治・大正・昭和期に活躍し、現代俳句への流れを生み出した俳人たちの短冊、掛軸など73点を展示しています。

江戸が東京と名前をかえた新しい時代 明治 を迎えて日本は西洋文化の波にさらされ、物事や認識の大きな変化を体験することとなりました。明治の半ばに、日本語の書き言葉と話し言葉を一致させる「言文一致」が起こったことで、文学は大きく変わりました。

同じ頃、俳句や短歌など日本独特の短詩型文学に注目し、江戸時代の旧態を守る俳諧の世界に革新を起こしたのが、正岡子規の「日本派」、尾崎紅葉の「秋声会」、「筑波会」などに集った人々です。なかでも正岡子規は、江戸時代からの俳諧の流れを汲む「旧派」に対し、新聞『日本』の俳句欄を通して全国的に俳句革新を進め、柳原極堂・寒川鼠骨・村上露月などがともに活躍しました。

愛媛県松山市で創刊された雑誌『ホトトギス』は、子規から高浜虚子、河東碧梧桐らに引き継がれて近代俳句の牙城となり、子規没後は虚子を中心に渡辺水巴・村上鬼城をはじめとする俊英が

集い、近代を代表する俳人たちを輩出しました。



ホトトギス 表紙

正岡子規 子規肖像拓本・「家五百」句短冊

一方、碧梧桐は新傾向俳句を提唱して『ホトトギス』と虚子から離れます。新傾向俳句は十七音の定型、季題(季節)を無用とするなどの自由律俳句へと向かいました。

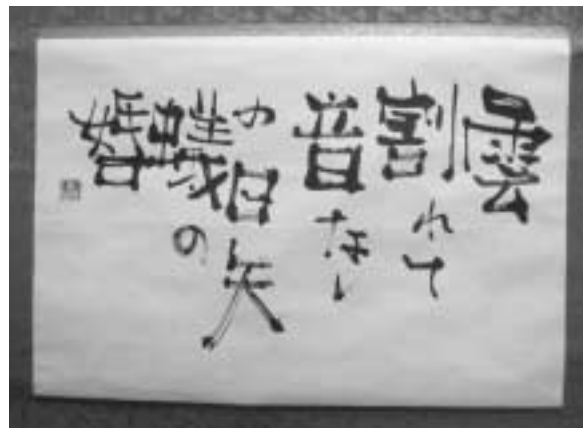
大正から昭和初期にかけては、自己の作風を確立させ新しい俳句雑誌を創刊主宰する俳人たちが現れます。原石鼎の『鹿火屋』、飯田蛇笏の『雲母』などは、その後現代を代表することとなる俳人たちを育てました。

今回の展示では、旧派から日本派をはじめ、子規、虚子、碧梧桐から『ホトトギス』第一次黄金期の俳人たち、大正・昭和初期に活躍した俳人たち、昭和の戦前戦中を経て、戦後俳壇に活躍した秋元不死男・加藤楸邨をはじめ、雑誌『俳句』編集長を務めた西東三鬼、前衛俳句の高柳重信、江東区にゆかりのある石田波郷など現代俳句を担った昭和の俳人たちの作品まで紹介します。

初公開となる高浜虚子「遠山に」句短冊は、明治33年子規存命中に作られた句で、虚子の代表句といわれています。その他、芭蕉研究と連句研究に励んだ宇多零雨「みちのくの」句短冊、俳誌『小熊座』を創刊主宰し昭和から平成と活躍した佐藤鬼房「雲割れて」句幅などを初公開します。

近代から現代、そして現在へ連なる

俳句と俳人たちの系譜をじっくりとご覧ください。
(中村美樹子)



佐藤鬼房筆「雲割れて」句幅

芭蕉記念館

開館時間

午前9時30分〜午後5時

(4時30分までにお入りください)

展示室休室

第2・4月曜日(祝日の場合は翌日)

入館料

大人100円・小中学生50円

(団体20名以上大人70円・小中学生30円)

交通

都営地下鉄新宿線・大江戸線

森下駅下車 徒歩7分

問合せ

江東区芭蕉記念館

江東区常盤1 6 3

☎03(3631)1448

「銀鱗跳躍〜夏の魚・鮎と人々〜」

平成20年7月19日〜8月31日

中川船番所資料館では、2階常設展示室にて江戸和竿を中心とした釣具と、日本の釣り文化に関する展示を行っています。今回の展示は、釣りの対象の中でも夏の魚であり、古来から人々と深く関わってきた魚、鮎にスポットを当てて紹介したいと思います。

鮎は日本全国の河川に生息する淡水魚で、世界的には日本と朝鮮半島〜東アジアに生息する魚です。同じ淡水魚である鯉の仲間などが世界各地に分布しているのに対して、鮎は日本の清流を代表する淡水魚と言っても良いでしょう。

先に鮎は淡水魚と書きましたが、幼魚の頃は海で生活し、やがて春が過ぎると川を遡上して淡水で生活するようになる。「両側回遊」という性質を持っています。川で生まれた稚魚は生まれやすく海へ下り、毎年5〜10cmの大きさにになると再び川を遡り、川の上流〜中流域で生活します。稚魚の時はプランクトンなど動物質のエサを食べますが、成長するにしたがって水中の岩に付くコケを食べるようになり、体からはスイカのような芳香が漂います。そしてエサとなるコケの付いた岩の周りを自分の縄張りとして、他の鮎が縄

張りに近づくとは体当たりをして追い払う性質を持つようになります。この性質を利用したのが、現在鮎釣りの主流となっている「友釣り」という釣り方で、釣り人たちが川に立ち込んで長い竿を振る姿は夏の風物詩にもなっています。

鮎と日本人の関わりは古く、約1300年前に書かれた日本書紀にもその記述があり、万葉集の中でも詠まれています。美しい姿と、食味の良さ、そしてたった一年で寿命を終える儚さ、潔さが、日本人に愛される理由でしょう。

同時に、鮎は釣りの対象魚としても人気が高い魚です。現在の主流である「友釣り」はエサを使わず、オトリの鮎を泳がせて追い払おうとする鮎を引つけるという世界的に見ても大変珍しい釣り方であり、同時に高度な技術を駆使する釣りでもあります。

使用する竿は、昔は四間（7.2m）を基本として、現在では10m近い長さのものが主流となっています。昔は竹製の和竿でしたが、その後釣り技術の進歩とともにより長くて軽い竿が求められるようになりました。その後昭和40年代になると、カーボン素材の鮎竿が開発され、その釣り竿の技術革命は日本の釣具製造産業を大きく成長させました。釣り竿から始まったカーボン素材の製造技術は、その後、人工衛星の開発などにも応用されていくことになりました。鮎釣りに「軽くて長い竿」を求める声があれば、今日の人口衛星や航空技術も発達していなかったかもしれません。

展示では、鮎と日本人の関わりや鮎の和竿をはじめとした釣り道具類の紹介のほか、鮎釣りに造詣の深い方からのお話しも伺いながら、季節感溢れる鮎の魅力を紹介したいと思えます。この機会に是非ご覧下さい。

（中川船番所資料館 中林哲雄）



『月刊つり人』創刊号 当館蔵



汀石作 鮎竿 当館蔵

中川船番所資料館

開館時間

午前9時〜午後5時

（4時30分までにお入りください）

展示室休室

毎週月曜日（祝・祭日は除く）

入館料

大人200円・小中学生50円

交通

都営地下鉄新宿線東大島駅

（大島口）下車 徒歩5分

問合せ

江東区中川船番所資料館

江東区大島9 1 15

☎03(3636)90991

夏の風物詩 簾を展示

日本では昔から衣替え(更衣)という慣わしがあり、近年では6月に行われるのが一般的です。かつては衣服だけでなく、住まいも衣替えをしていました。部屋を仕切る襖や障子をはずし、風通しのよい簾戸や簾をかけ、畳の上にはひんやりとした足ざわりの籐の敷物を敷くこともありました。旧大石家住宅でも、こうした夏の風物詩を取り入れ、座敷の襖を簾に替えました。

簾は、軒先にかけて日除けしたり、室内の間仕切りや装飾として、高温多湿な日本の夏を快適に過ごすための必須アイテムとして古くから活用されました。江戸時代中後期に流行した川柳にも「すずしさをかついでありく簾売り」(『誹風柳多留』)とあるように、江戸の町では、簾を担いで売り歩く行人が廻ってききました。扇風機もクーラーもなかったころ、簾は涼を得る道具であったとともに、見た目にも涼しさを感じさせる存在だったのでしょう。

アスファルトの地面を渡る風は、かつてのような涼しさを運んでこなくなりましたが、旧大石家住宅の庭は、仙台堀川公園を抜ける風が心地よく吹き抜けます。

展示中の簾は、日本橋の老舗料亭で昨年末で使用されていたもので、60年以上前のものです。重ねた年月が落ち着いた風合いを出しています。江東区指定無形文化財(簾製作)の技術保持者である豊田勇さんから寄贈いただいたもので、縁は付け替えていただきました。(文化財主任専門員 向山伸子)



旧大石家住宅内で展示中のすだれ

場所 江東区南砂5 24地先
(仙台堀川公園内)
公開日 土・日・祝日
時間 午前10時～午後4時
交通 地下鉄東西線南砂駅下車徒歩15分
都バス[亀21] (亀戸駅前) 東陽町駅前 [門21]
[東大島駅前] 門前仲町 [両28] (葛西橋) 両国駅前 [亀29] (なぎさニュータウン) 亀戸駅前 [秋26] (葛西駅前) 秋葉原駅前 [亀高橋] 東砂4丁目下車徒歩5分

江東外伝 見発見見

源頼朝墓・島津氏墓と三井親和

多くの観光客でにぎわう古都鎌倉。ここに深川と深い関わりを持つ書家三井親和の痕跡を見つけました。鎌倉でも有名な史跡の1つである源頼朝の墓。旧大倉幕府跡(現清泉小学校)の北に頼朝を祀った白旗神社(旧法華堂)があり、神社脇の参道を登ると山の中腹に頼朝の墓が建っています。さらに頼朝墓の東には幕府の重臣大江広元と島津氏の祖惟宗忠久の墓が並んで建っています。

これらの墓は安永8年(1779)に薩摩藩24代藩主島津重豪が整備したものです。というのも惟宗忠久は頼朝の落胤という伝承があり、島津氏は自家を権威付けるために墓を整備しました。そして頼朝墓と忠久墓へと続く参道には道標が建てられていました(現在は頼朝墓の下にあります。写真)。この碑には「頼朝公御石塔及元祖島津豊後守忠久石塔道ノ承 薩州侯之命東都龍湖親和八十歳謹書ノ安永八年己亥二月 薩摩中将源重豪建之」と刻ま



源頼朝墓



惟宗忠久墓

ており、「深川親和」とも称した三井親和が80歳の時に島津重豪の依頼により書いたことがわかります。また、頼朝墓と忠久墓の右前に建つ玉垣・燈籠・水盤の奉納碑にも「承ノ薩州侯之命東都龍湖ノ親和八十歳謹書」と刻まれています(写真)。親和の名声は大



写真

大名の藩主である島津重豪にまで届いていたのです。(文化財専門員 赤澤春彦)



写真

文化財
指定文化財修復報告

昨年度、区指定有形文化財(建造物)となつた石造燈明台(明治31年在銘(富岡1深川不動堂、所有者江東区)を隣接する深川公園に移設するため、5月19日から工事をはじめています。

奉納者が刻まれた外壁石板の補強工事と基礎部分の調査を行いました。8月上旬に工事が完了する予定です。